

不登校対応巡回教員との連携について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校中学年から登校できない状態にあった。今年度、校内別室を活用した不登校支援を開始し、校内別室には登校できるようになり、教室にも入れるようになった。校内別室の運営上、当該生徒にどう対応すべきが悩ましいことが多々あったが、不登校対応巡回教員がコーディネーターとして取組を調整し、校内の教職員が組織的かつ一貫した対応ができるようにした。

具体的な取組

○不登校支援会議に参加

不登校対応巡回教員が生活指導部会と併設した不登校支援会議に参加し、先行事例の紹介や、本校の不登校対応について全体を俯瞰する立場から評価、助言を得て、効果的な対策となる取組につなげた。

○別室指導支援員との連携

不登校対応巡回教員が校内別室での対応に主にあたる校内別室指導支援員と密に協議を重ね、助言を行い、当該生徒への支援をより効果的な取組とした。

○不登校対応巡回教員による直接支援

不登校対応巡回教員自らも進んで当該生徒への直接支援に当たり、生徒理解を深め、その成果を校内別室指導支援員や担任に還元した。

また、ケース会議の円滑な進行と成果の還元に貢献した。



○別室運営上のルール策定

不登校対応巡回教員が始まったばかりの校内別室の運営上のルール策定について、管理職や生活指導主任など多くの関係者の意見を集約し、将来を見越した運営も踏まえて適切なルールを策定した。

成果

校内別室の実態に合ったルールづくり、運営方法に貢献し、方針の策定が成果を生んだ。

不登校対応巡回教員が、管理職、教職員、校内別室指導支援員等の意見を調整し、コーディネーターとしてその運営を推進した。

また、随時、効果的な評価、助言をした。

課題

巡回教員のコーディネートの継続性を確保することや他の学校の好事例を取り入れることが必要である。

リモート授業と校内別室による登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学から1学期の間は登校していたが、2学期から体調不良を訴え、登校できなくなった。保護者は、SCへの相談や、担任の家庭訪問、面談などを通して学校とつながりを保っていた。当該生徒は、学習への頑張りが結果に表れず、努力する意味を見いだせない気持ちをもっていった。

具体的な取組

○リモート授業の実施

1時間目から6時間目までの授業をオンライン配信し、別室や家庭から受けることができるようにしている。授業プリントは教科担当が事前に渡し、主に教科書とプリントを使って授業を受けることができるようにした。また、授業の終わりなどに教科担当が提出物などを回収することにした。

○校内別室の利用

登校意欲はあるものの、教室には入れず、周囲の生徒の様子も気になってしまうため、校内別室では、パーティションを使用して個別の空間をつくり、リモート授業に集中できる環境づくりを整備した。



○行事への参加に挑戦

事前学習や事前指導などへの参加を促した。教室に入っている活動ができない時でも、リモートで説明を受けたりするなど、当該生徒が取り組むべきことやタイムスケジュールの確認を行った。行事の係活動にも責任感をもって取り組むことができた。

○家庭との連携

電話連絡や家庭訪問の他に、保護者との三者面談などを通して、家庭との連携を密に行った。当初は、親子での面談だったが、徐々に当該生徒のみとの面談もできるようになった。

成果

進級を機にほぼ毎日登校し、校内別室でリモート授業を受けるようになった。学年で取り組む行事にも参加することができた。当該生徒は教室で授業を受けることを目標にするようになった。

課題

2学期以降における現状の維持・継続、教室復帰に向けた取組が課題である。

登校不安を感じる生徒やその保護者を対象にした学校説明会及び懇談会の実施と不登校生徒支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の後期から、起立性調節障害の影響で規則的な登校が困難になり、学習への遅れが生じ、徐々に登校できなくなった。午後の授業や、給食などを利用して登校することもあったが、進路選択への不安が大きくなっていった。

具体的な取組

○多様な進路先に興味のある生徒、登校に不安を抱える生徒向け学校説明会の実施
進路選択に関する保護者の要望もあり、教育支援センターで行う学校説明会よりも先に、校内で都立チャレンジスクール校長を招いた学校説明会を開いた。また、会の後半では、不登校対応巡回教員とともに懇談会を実施した。

○S Cとの連携

保護者のS Cとの定期的な面談を通して、保護者がもつ不安感や懸念を和らげるように働きかけた。



←多様な進路先に興味のある生徒、登校に不安を抱える生徒向け学校説明会の様子

○不登校対応巡回教員による個別対応
進路選択について志望する進学先の入試対策のため、作文添削、自己PRカードの作成などを不登校対応巡回教員が個別対応した。加えて、これまで十分にできなかった学習をやり直したいという気持ちから、学習の個別対応もするようになった。

○行事参加に挑戦

事前学習や事前指導などへの参加を促した。事前学習などは午後の時間帯で設定し、朝、体調が理由で登校できないときでも支援できるようにすることで、参加できる日が増えた。

宿泊行事にも取り組むことができ、生徒自身のよい成功体験となった。

成果

学校説明会や懇談会を実施することで、不登校対応巡回教員が直接生徒や保護者に関わるきっかけになり、その後の対応が進展するようになった。また、生徒の意向を踏まえらるようになった。

課題

個別対応に関する時間的、人的制限があり、対応時間の拡大が難しいなどが課題である。

校内別室と不登校の未然防止について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校3年生への進級とともに、欠席が続いた。校内別室を開設したことで、週3日のペースで登校できるようになった。また、校内別室においてはタブレット端末を活用した学習やプログラミングの作品づくりに取り組むことで自信をもち、卒業後の進路について前向きに考えている。

具体的な取組

○学年、特別支援学級との連携

不登校の未然防止を図るため、各学年及び特別支援学級で居場所づくりと絆づくりの取組を行った。例えば、2年生ではグループエンカウンターを実施し、特別支援学級では笑顔のフォトコンテストを実施した。



○週1回の支援会議の実施

週1回、支援会議を行っている。メンバーは管理職・生活指導主任・学年主任・養護教諭・不登校対応巡回教員・SC・SSWで構成される。生徒の情報を共有し、支援の手だてを検討することで、組織的に不登校対応に当たっている。また、不登校に関する資料を共有することで、不登校対応のノウハウを蓄積している。

○デジタルを活用した学習活動

校内別室において、デジタルを活用した学習活動に取り組んでいる。AI学習ドリルの活用によって、学び直しができ、生徒に必要な知識を身に付ける個別最適な学びとなっている。また、NHK for Schoolを活用し、生徒の興味・関心に応じて、自己決定を大切にしながら学習に取り組んでいる。

○生徒アンケートの実施

魅力ある学校づくりを目的とした生徒アンケートを年3回行い、学校風土の見える化を行っている。アンケートの結果を踏まえて、学年及び特別支援学級において、居場所づくりと絆づくりの取組を行った。また、ふれあい月間に行う生徒アンケートとの関連を図り、不登校の未然防止の取組の参考としている。

成果

不登校出現率が3.76%であり、昨年度よりも減少傾向にある。教職員の不登校に対する意識が高まり、不登校対応を組織的に進めてきたことや校内別室を開設できたことが要因として考えられる。

課題

校内別室の運営に当たっては、授業の空き時間の教員を充てているため、校内体制の整備が今後の課題である。

不登校への多様なアプローチについて

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 3 年生であり、1 年生の途中から不安感により学級に入ることができなくなった。2 年生に進級後は、校内別室を利用しながら継続的に登校し、リモートによる授業参加や自習に取り組んでいる。校内別室の他の生徒と良好な人間関係を築き、自己肯定感が高まってきている。3 年生からは、学級への復帰を目標にしている。

具体的な取組

○校内別室でイベント実施

校内別室内で、月 1 回、カードゲームコンテストやクイズコンテスト等を行ってきた。イベント実行委員会を立ち上げ、企画や運営を生徒自身が行うことで、主体性を発揮し、活躍する機会となっている。



○教育支援センターと連携した研修

校内研修において、教育支援センターと連携し、VLP やオンライン学習の活用方法について実践的に学んだ。不登校が長期化している生徒に対しての学習保障や支援の選択肢を増やせることについて理解することができた。



○生徒アンケートの活用

年 3 回実施する生徒アンケートにおいて、学校独自の質問項目を設定した。「仲間はあなた自身やあなたの個性を尊重し、安心して学校生活を送れるかどうか」等の項目から、現状を把握し、学校風土の見える化を図り、不登校の未然防止に役立てることができた。

○挨拶運動

安心して学校生活を送れるよう、挨拶運動を行った。通常の昇降口付近での挨拶運動に加え、生徒会の発案で、校門前でも挨拶運動を行った。地域の方や小学生に対して、進んで挨拶をすることで、地域全体のつながりを生む取組となった。



成果

生徒アンケートでは「仲間はあなた自身やあなたの個性を尊重し、安心して学校生活を送れるかどうか」という質問に対して、90%以上の生徒が肯定的な回答をした。また、校内別室を開設したことにより、複数の生徒が登校できるようになった。

課題

継続的に校内別室に登校できるようになった生徒に対して、段階的に学級復帰や学習機会を増やしていくことが課題である。

不登校傾向が出た生徒に対する支援会議による迅速な対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学生の時は、不登校であったが、中学生になり毎日登校するように頑張っていた。教室で過ごす中で、教室に居づらい状況が増え、別室を利用したり、欠席したりすることが徐々に増えていった。

具体的な取組

○SCとの連携

当該生徒は、にぎやかな雰囲気のある学級に疲れてしまい校内別室に登校した。その際に養護教諭や不登校対応巡回教員、SCとつながり、週1回のSC面談を行い、継続できた。当該生徒に複数人に関わることで、関係者が連携することで必要な支援が充実した。

○校内別室への利用

本校の校内別室は利用時の申請等はなく、生徒が利用したい時に利用できる。そのため、にぎやかな雰囲気に疲れてしまったタイミングで校内別室を利用してよいことを伝え、校内別室の利用を促した。その後、毎日校内別室に登校できるようになった。

○支援会議の実施

SCとの面談の様子や校内別室の利用状況、不登校対応巡回教員が当該生徒から聞いたこと、担任からの声かけなどを支援会議で共有し、今後に必要な支援や方向性について検討した。



○部活動だけの登校

「学校に行きたくない」という生徒の気持ちについて、「どうして行きたくないのか」ではなく、学校の何がそうした気持ちにさせるのか、当該生徒に分析・言語化できるようにした。その結果、教室に行きづらいということに当該生徒が気付いたため、部活動だけでも登校できるように支援した。

成果

不登校傾向が現れ始めた週は連続して欠席があったが、必要な対応をすぐに行うことで、現在では欠席日数が30日を超えることなく、遅刻はあるものの毎日登校することができ、一部の教科で教室復帰している。

課題

校内別室の利用で学習時間を確保しているが、教室復帰や進級に際し、学力定着などの検討が課題である。

不登校の未然防止とリモート配信の工夫等について

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校3年生の進級後、対人関係への不安から学級に入ることが難しくなった。校内別室を利用し、授業のリモート配信による学習に取り組みながら、落ち着いて過ごしている。担任・学年教員・教科担任・不登校対応巡回教員等による組織的な支援により、現在、継続的に登校できている。

具体的な取組

○生徒が主体となった「絆づくり」

不登校の未然防止を図るため、「絆づくり」として生徒が主体となって取り組む活動を大切にしている。新入生歓迎会では生徒会が主体となって盛り上げ、体育祭のソーラン節では全学年縦割りの集団を作り、第3学年の生徒中心に取り組んだ。



○「学校の困りごとアンケート」の実施

魅力ある学校づくりのための生徒アンケートを年3回実施した。さらに、第3学年では、学級委員による「学校の困りごとアンケート」を実施し、学校生活全般に関する意見を募集した。校則、教室環境、登下校等に関する意見を検討し、改善を図ることで、生徒にとって行きたくなる学校づくりを実践している。

○授業のリモート配信

授業のリモート配信に生徒がすぐにアクセスできるようにした。各教室にタブレット端末用の三脚を常置し、職員室内のホワイトボードに配信を希望する生徒名を表示した。また、授業では、資料提示や課題提出をオンライン上でできるようにした。

○支援会議の実施

隔週1回、管理職・特別支援教育コーディネーター・学年教員・特別支援学級担任・不登校対応巡回教員で構成した支援会議を実施している。生徒の情報を共有し、支援の手だてを検討することで、組織的に不登校に対応している。また、教職員の不登校への対応力向上を図るため、研修を実施している。

成果

不登校対応巡回教員が配置されたことにより、校内別室における取組の幅が広がり、手厚い支援ができるようになった。また、生徒アンケートを実施することで、生徒の現状把握ができ、課題を可視化することができた。

課題

不登校が長期化し、外部機関とつながっていない生徒が登校できるよう、関係機関との連携や取組の充実が課題である。